

2020年、日本の「体育」を発信する機会

「スポーツを通じた街づくり」

阿江通良氏（筑波大学副学長、理事）

筑波大学は1878年の体操伝習所に始まり東京高等師範から東京文理大、東京教育大学、筑波大学に至る歴史のなかで一貫して嘉納治五郎先生の「師魂理才」、グローバルな視点での文武両道の精神を受け継いできた。加藤沢男（体操）、谷本歩実（柔道）両氏に代表される金メダリストを含む100人以上のオリンピック選手を輩出し、10年後には世界の大学で3番以内に入るべく、教師、学生ともに励んでいる。

私はスポーツバイオメカニクスの立場から科学的な理論体系化に取り組んでいる。スポーツバイオメカニクスに出会ったのは1991年、カール・ルイス（米国）が100m走で当時の世界記録9秒86を出したときのフォームの詳細を知ったときだ。当時のトレーニング法では振り上げる方の膝を高く上げ、地面に着いている方の足はピンと伸ばすのを良しとしていた。ところが、ルイス選手はまるで逆のフォームで走っていた。膝はそれほど高く振り上げず、地面に着いている方の足は曲がっていた。

これを機に、試合中のアスリートの動きを計測することの重要性が、日本のバイオメカニクス研究者の間で広く認識されるようになった。個性的な走り方に見えて、トップアスリートの走りを重ねてみると、末次慎吾選手や今の桐生祥秀選手にも共通する標準動作となっている。これらをデータベース化して改善を図ることで、たとえばつくば市立竹園東小学校の児童のボール投げの記録が向上したりする成果を上げている。

1560年に描かれたブリューゲルの「子どものあそび」という絵には約80種の遊びが出てくるが、今の子供たちの周囲にはない。子供運動能力の低下、あるいは運動する子しない子の二極化は深刻な状況に陥っており、世界一不器用な子供の座をアメリカと争っているほどだ。2000年以降、小学生の体力測定の数値は如実に下降線をたどっている。

心身の不統合が起こっている。小中高校、そして大学まで「体育」の授業があるのは日本ぐらいだった。ヨーロッパにおいてスポーツはコミュニケーションの手段で、社会を活性化させるうえで必要な教養の一つとされてきた。そのヨーロッパが、日本には「体育」というすばらしい考え方があるとうらやんだ。「体育」の直訳はなく、「スポーツ&エクササイズ」などと訳しているが、日本的な「心身一如」の思想までは訳しきれない。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックこそは、日本の「体育」を発信する機会と考えている。

この際、たとえば生活の体育化という提案ができる。スポーツの生活化ではない。生活空間を体育的にデザインする。たとえば街にいただけで、スポーツはしなくても、歩いたり美術を鑑賞したりすることで、身体に体育をしたかのような適度な負荷がかかって、休憩をとることまで含めて体育になる。そういう住む人の心構えと価値の環境が相互作用をしていけるよう街をデザインするという考え方が望まれる。

「スポーツの街つくば」では核となるスポーツセンター（仮称）が地域の各種スポーツ

施設と連携する。スポーツアスリートばかりでなく、障害者スポーツ、スポーツ医学、健康増進、さらには市民交流や防災の機能までとり入れたセンターである。日常的な運動・スポーツの場の一方、非日常的な運動・スポーツを行ったり見たりする場があることで、気持ちの切り替えがスムーズになったり感動を鋭敏化させたりできる。

スポーツを通じた街づくりとは、知性・身体性・感性を備えた人づくりである。

(文責／CROSS T&T 編集長／相澤冬樹)